

表参道日記 163

記憶と記録に残る人生

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

手堅い野球で38年ぶりに阪神タイガースが、同じく在阪球団であるオリックス・バッファローズを下し全国一に輝いた。その優勝への導きには厚い選手層に加え、岡田彰布監督の際立った名將ぶりがあったのではないだろうか。そして監督が発した「あれ」という言葉。間違いなく今年の流行語大賞にノミネートされることであろう。その「あれ」であるが、ペナントレースの終盤にマジックナンバーが点灯し、優勝が付いてきた際に、指導者が選手やファンを落ち着かせるように、パッと思い付いたワードでは決してなく、岡田監督が春先から明言していた合言葉である。

現に今年のベースボール・マガジン社の岡田監督のメッセージ欄には「目指すのは『あれ』しかない」と明記されていた。まさに有言実行である。

岡田監督は小生と同一年である。よって優勝インタビューの、「38年前には27歳であり、ここまで随分長かった」という節に重みを感じた。1985年といえ、小生は外科医師1年目であり、

大学病院の詰所で当直に明け暮れていたことを思い出す。そこで既に球界のスターであった岡田氏と自分の職業史を照らし合わせるのもおこがましい限りだが、38年前に働き盛りの凡人が定年年齢に至るまで同じ仕事に従事し続けてきた時間軸は、岡田監督の野球人生と同様に随分と長かったものだ。野球の選手も一般人と一緒に歳を取っていくわけだが、ドラフト会議から始まり、数年の内に大多数の人間が夢をあっさり失職してしまうのが現実である。

それだけのポリュームの人間がステップアップを図り続けられるのであろうか。特別な記録も達成できず、記憶に残らなくても同じ仕事を愚直に38年間無難に遂行出来る人生も地味で素敵である。「あれ」の達成は、まさに人それぞれであらう。

毎春、全国の書店レジ横に複数社から監修されたプロ野球選手名鑑が平積みされる。小生は毎年その小雑誌を購入するのが習慣化している。内容は個人情報報そのものである。各選手の生年月日から血液型、出身地、身長体重、学歴、成績、年収までが細かく網羅されている。昔は現住所から配偶者、子供の有無まで記載されていたものと記憶している。犯罪予防のためあらゆる名簿の取り扱いが厳格化されている昨今においては珍しい代物である。そし

一般社会の様も同様に思う。若者の転職がブームであり、能力の高い人間が新しい職種で成功すると聞くが、ど

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> ざっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

